

2 コラム RAMPWAY
泉 麻人

特集 地域の活性化

5 クリエイティブな地方都市へ
東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻 准教授
瀬田史彦

9 地方創生を仕切りなおす
日本経済新聞 編集委員兼論説委員
谷 隆徳

12 ぶら〜り首都高めぐりの旅
川口線の巻

13 CHALLENGE
工事実施ルールの革新

14 Taste of the Season
森下典子

16 首都高HEADLINE

18 BUSINESS ESSAY
地元民へ

写真家
平井慶祐

20 つくる人まもる人
首都高ETCメンテナンス(株)
柳 正一

22 高速百景 中野正貴

contents produced by
Metropolitan Expressway Company Limited



illustration by Takao Nakagawa

column | RAMPWAY 35

首都高名所案内
40年前の
霞が関界限

コラムニスト
泉 麻人

先頃、「東京23区外さんぽ」という本を上梓した。「23区外」とあるように、これは多摩の市町村部を順に巡り歩いたエッセー集なのだが、多摩市の聖蹟桜ヶ丘のあたりを散策していたときに、旧鎌倉街道ぞいの神社の門前に〈霞ノ関南木戸柵跡〉という謂れ書きが立っていた。調べてみると、関戸というそのあたりの土地もかつて「霞ノ関」とか「霞ヶ関」とかの別称があった

たらしい。そう、確か埼玉県の川越の近くにも霞ヶ関という駅があったはずだが、この地名はけっこう各地に存在するようだ。

とはいえ、霞が関といえば、誰もがまず思い浮かべるのは都心の官庁街周辺の風景だろう。そこで練り広げられる、政治の世界を表す言葉にもなっているが、僕にとって思い出深い霞が関は日比谷公園南方の界限。カマボコ型

の特徴的な屋根を見た、プレスセンターというビルが建っているけれど、そこに入っていた出版社に勤務していた時期があった。70年代の終わりから80年代の初めにかけての2、3年、いわゆる新卒で就職した出版社である。プレスセンターのビルもまだ真新しい感じの頃だったが、内幸町交差点側のフコク生命ビルのブロックはちようど建設工事中の時期だったと思う。裏手の道には2、3階建ての小さなビルがぼつぼつと残っていて、上司に連れられて、そういう一角の狭いメシ屋で昼食を取った。食後に立ち寄り喫茶店で、スペースインベーダーにハマった先輩が黙々とゲーム卓に向き合っていた光景も回想される。卓の隅っこに百円玉を何枚も積み上げて、ランチタイムを過ぎても彼は一向に戻ってこなかった。

書きながら記憶が甦ってきたが、そういうえば当時裏道には雀荘もぼつぼつと見受けられて、雑誌の校了明けの暇なときに麻雀を打ったこともあったな……。

官庁街側の角っこの飯野ビルもなつかしい。高層ビルに改築されていまでも健在だが、昔のビルの飲食店街には「最良の店が何軒かあった。」

1階のケルンという洋食屋は、クラシックな銀皿に盛りつけられたオムライスや長ネギが添えられた豚シヨウガ焼が格別だった。ココはいつも虎ノ門のビルで営業中なので、たまに立ち寄る。地階の奥にあった更科の「桜そば」というのも独特のメニューだった。冷たいカケそばの上に揚げた桜えびがごっそり盛り盛られている。食べるうちに桜えびの衣がツユに浸って、べっちょりとした感じになって、終盤はちよつときついんだけど、ひと月くらい経つとまた衝動的に食べたくなるような味だった。

飯野ビル内のイイノホールではよく演芸の公開録画が催されていた。NHKの新人漫才コンクールだったと思っただが、ここで初めて観たツープートの漫才は刺激的だった。漫才ブームが始まる1年くらい前だったはずだが、遠方のステージで若きタケシがまくしたてるように喋っている姿が目焼きついている。

いずみ あさと / 1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。「週刊TVガイド」などの編集者を経て、フリーのコラムニスト。近著に「東京いい道、しぶい道」(中公新書ラクレ)がある。